

募集しています。写真を大いに楽しんでるクラブ、グループ、教室、また高校、大学のサークルなどの例会におじゃまします。ご希望の方は、クラブ名・代表者名・創立年・会員数・連絡先・例会日、簡単なクラブ紹介を、編集部「写真仲間」に「会いに行く」係までお送りください。



夕暮の渚 山本陽三



夕照 松根 健



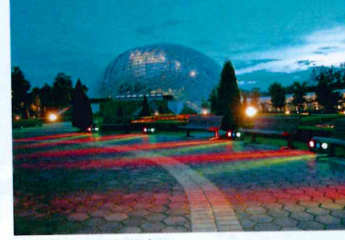
想い 塩谷義勝



夏山 宮城和嗣



裏通り 竹川豊彦



夕暮れ 福島庸二



サギソウ 小田光朝



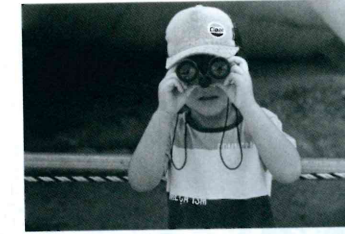
蝶の谷(海南島) 山本尚志



梨の花の咲く頃 田中一男



白馬梅池 山本賢徳



視る 杉野昭久



ブルーインパルス 恩田 稔



おばあさん 浅井慶紀



常夏の国で 森 和枝



光影 金居恵理子



眺望 井本静治



【後列左から】門脇義憲、山本尚志、井本静治、野村康典、松根 健、恩田 稔、山本陽三、福島庸二、杉野昭久、岡 敏文  
【前列左から】山本賢徳、田中一男、佐野 久、小田光朝、塩谷義勝、竹川豊彦、横川稔生、石田雅栄



現在の例会風景。  
昔も現在も金居商店の2階で会は開かれる



戦前の光景倶楽部時代の例会風景。  
台紙に張った作品を手にする会員のみなさん

# 写真仲間 会いに行く

Photo Club

## フォトクラブ・シャイン

代表者：塩谷義勝  
 創立年：1969年  
 会員数：32人  
 事務局：(株)金居商店  
 〒680-0031  
 鳥取市本町1丁目203  
 TEL：0857-23-0321

今回は、鳥取市のフォトクラブ・シャインの皆さんを紹介いたします。  
 このクラブは、1919(大正8)年に発足した光影倶楽部が前身となっている(詳細は286頁参照)。戦争のため自然消滅したが、地元の写真を楽しむ方々の熱意で名称を変え、69年に再開。  
 10月13日(木)の例会におじゃました。会場は、光影倶楽部時代から変わらず、事務局である鳥取市内のカメラ、OA機器などを扱う金居商店の2階。  
 例会は、2L以上のプリントを提出し(枚数の制限なし)、優秀作品を3点選び、12月には年度賞を決める。例会の進行役は、月替わりの当番制。  
 今月の担当は田中一男さん(79)。田中さんは、創立会員で旧国鉄のOB。若桜線の若桜駅長を最後に定年退職した。82年に28歳の若さで亡くなった息子の憲司さんがまだ中学生のころから、休日になるとふたりでSLの写

真を撮りに出かけた。そして、十七回忌の供養にと99年には写真展を開催し、翌年、写真集も刊行している。  
 36年間、鳥取県漁業取締船に乗っていたという塩谷義勝さん(61)は、今年、定年退職を機に会長に就任した。  
 杉野昭久さん(60)は、78年に入会。中学生のときに、トイカメラで友達を撮って遊んでいた。ネーチャーや植物を中心に、飾れる写真を心がけて撮っている。数年前には、ソフトレンズで撮った花を個展「花の詩」で発表。  
 最年長の小田光朝さん(88)は、昔から花を育てるのが趣味で、その美しさを残したいと写真始めた。30年前にペンタックスファミリーのコンテスタでサギソウを撮り入賞している。83年に鳥取県庁を退職してから山草会に入会。日本ツバキ協会の会員でもあり、自宅には200品種のツバキの鉢植えがある。来年4月5〜11日に鳥取市の中電ふれあい

ホールで花の写真の個展を開催する。  
 10年前に入会したという若手の恩田稔さん(50)は、人物や電車や飛行機など、いろいろな被写体を撮っている。  
 創立会員の横川稔生さん(70)は、高校生のときにカメラを始めた。「仕事を始めてからは思うように撮影会に参加できなかったが、6月に定年退職したので積極的に参加しますよ。ペンタックスSPやプロニカ、フォクトレンダーなど主で風景を撮っている。本誌79年12月号に鳥取希望撮影会で撮影した作品が掲載されている。  
 新会員の石田雅栄さんは歯科医師。患者として通院していた塩谷さんが、野草の写真を見て勧誘。  
 撮影会は月1回。「11月は智頭で紅葉を撮ります」と、当番の竹川豊彦さんが発表した。(本誌「宮野純子」)

### ラムダ体験はお済みですか?

ラムダプリントは、デジカメ時代に対応して登場した印刷紙タイプによる最高品質のカラープリントです。デジカメデータからのプリントで、プロが自信をもって認めるのもラムダプリントです。しかも、インクジェットプリントと比較して引伸ばしに大変優れた特長を持ち、少ないデータ量でも驚くほどの表現力を発揮します。ベストカットはより美しく残してください。

ラムダ体験お申込みの詳細は...  
 堀内カラー東京事業所 (03)3383-3321

プロラボ 堀内カラー  
 www.horiuchi-color.co.jp

# 乾板に残った山陰の大正・昭和モダンイズム

## 吉田窓月と光影倶楽部



吉田窓月  
(1901~42)



植田正治は山陰の風土から生まれた写真家だ。大正から戦前にかけて、山陰は一大「写真王国」だった。それを支えた写真家集団が光影倶楽部である。中心メンバーのひとり、吉田窓月の発掘された乾板写真に、古き良き栄光の時代をたどる。(文中一部敬称略)

十数年前、鳥取市に住む地域デザイン研究所長の吉田幹男さん(68)は、改築のため自宅の古い蔵を整理していた。ふと、階段の下にある数個の木の箱に目が留まった。持つと、ずっしり重たい。中身は写真のガラス乾板。

「こりゃ、おやじの写真だ」

乾板は1500点におよんだ。映画フィルムの缶もあった。幹男さんの父、吉田惣一は木材商の総領息子で、窓月と号し、光影倶楽部の中心会員のひとり。大正後期から昭和初期にかけ、アマチュア写真家として活躍した。戦前の写真乾板は、工業資源として供出させられたり、戦災にあった

窓月はたひたひ子どものスナップを撮った。芸術写真ふうの作品も少なくない。右は家族の記念写真。どことなく植田調？

1924(大正13)年の富士山撮影旅行の記録。左は鳥取駅から山陰線で出発するメンバー。左から尾崎修三(映画館主)、金居乙恵(金居商店主)、米村義志、森重勇、吉田惣一



りしたケースが多い。鳥取市は1952年の大火で旧市街地の3分の2が焼かれたが、それも免れた。乾板は鳥取市歴史博物館(やまびこ館)で整理された。乾板からプリントがつけられ、データ化されて、一部は博物館に展示されている。絵画を思わせる雪の風景、鳥取市街のスナップ。とくに子ども

の写真は生き生きとしている。写真のなかには、光影倶楽部の有力会員ともに行った富士山の撮影旅行の記録もあった。現地で乗用車をチャーターしての、当時としては「大名旅行」である。撮影は箱形カメラで、足はゲートルにわらじを履いている。

この光影倶楽部は山陰の写真クラブの先駆けで戦前は全国でも屈指の会員数を誇った。創立1919(大正8)年。大阪最初の浪花写真倶楽部結成から遅れること15年。写真機やタイプライターを販売していた鳥取市の金居商店が事務局だった(286頁参照)。

当初の会費月30銭(大正12年創刊のアサヒクラブが1冊15銭)。カメラをもっていなくても入会できた。例会や撮影会の開催はほとんど同じ。随時、写真入りの会報も出して、これが人気だったよう

だ。会報創刊号の巻頭言は、東京美術学校(現・東京芸大)臨時写真科講師の久米福衛。久米は以前、鳥取中学の図画担当の教師。鳥取のアマチュア写真の生みの親といえるかもしれない。窓月は、22(大正11)年に倶楽部入会。25(大正14)年には会員は35人もいたという(このあたりの考証は、研究家の福田陽一さんの資料による)。

植田正治は、窓月より一回り年下だが、幹男さんに、「光影倶楽部はあこがれだった。お父さんの話も聞いていたよ」と話したことがあるという。光影倶楽部には、のちに世界的に知られる塩谷定好(1899~1988)もいた。窓月は塩谷とともに、28(昭和3)年の第3回日本写真大サロンと翌年の第3回国際写真サロンに入選したという。だが、窓月の大活躍は30年代のはじめまでだったようだ。昭和恐慌と戦争の影が迫っていた。

窓月は太平洋戦争下の42(昭和17)年11月1日、親類たちと海釣りに行き、高波にのまれて亡くなる。享年42。この年、アサヒカメラが休刊し、神戸では安井仲治が40歳で亡くなっている。

(岩田一平)

# アサヒカメラ

PHOTOGRAPHY  
JOURNAL  
ASAHI CAMERA  
DECEMBER 2005

840yen

# 12

[特別付録]  
カメラマン  
便利帳  
2006

瀬戸正人・植田正治・持田昭俊・星野博美・鎌澤久也・明石 瞳・星野尚彦・  
劉 敏史・広田尚敬・高橋 弘一・ポトフリオ・室田あい・喜多村みか・岡原功祐

# デジタル一眼D 200 の 全身の

[鉄道特集]

# S/L写真個性派宣言!

植田正治に会いに行く／コンフM3Aを堪能する

発売！ツァイスイコンの実力／本誌年度賞発表

[診断室] aSweet デジタル

